



Title	語り研究における「共同性」の検討
Author(s)	藤本, 愉
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 90, 43-69
Issue Date	2003-06
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.90.43
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28908
Type	departmental bulletin paper
File Information	90_P43-69.pdf



語り研究における「共同性」の検討

藤 本 愉*

Some Problems of “Collaboration” in Narrative Approach

Yuu FUJIMOTO

【要旨】現在の心理学においては、個々人が個別具体的な状況で発する「語り」(narrative)に注目する動きが徐々に活発になってきている。本論文では、まずはじめに、心理学にとどまらず、社会学などの隣接諸領域における代表的な語り研究をレビューする。続いて、現在の心理学に、語りを志向した研究を導入することは、どのような意義があるのか、語るという行為が持ついくつかの特徴に触れた上で論じる。最後に、語り研究の理論的前提のひとつである「共同性」の概念を中心に、現在の語り研究が抱えている理論的・方法論的問題について検討を行う。

【キーワード】語り、自己、共同性、語り得ないもの

はじめに

われわれの周囲には、実に多様な「語り」が充ち溢れている。われわれは日常、特に気にもかけてはいないが、企業、学校、家庭、地域など、それぞれが生きているフィールドにおいて多種多様な「語り」が取り交わされ、流通している。場合によっては、衝突を起こしたり、時には市場を介して「消費」されることもある。また、そのような無意識的な「語り」のみならず、外部に向けて意識的に発せられる「語り」もある。例えば、自らが抱える病いや障害についての語り、幼い頃から現在に至るまでの人生の語り、自らが属する民族、コミュニティに対する差別からの解放を目指そうとする語り…

近年、心理学において、個々人が個別具体的な場面において紡ぎ出す「語り」(ナラティブ：narrative)に対する関心が急速に高まってきている。それらの関心は、従来の心理学が、「客観性」、「普遍性」、「一般性」の名の下で排除してきた要素や側面、つまり人間の精神生活の「リアリティ」を取り戻そうとする試みに基づいていると言ってもよいだろう。

本論では、まず現在の語り研究が、歴史的・学問的にどのような背景を持って成立してきたものであるのか、心理学にとどまらず、社会学、人類学、さらには歴史学・歴史哲学などの周辺諸領域が蓄積してきた、代表的な語り研究のレビューを行う。

続いて、これらの語り研究が、心理学においてどのような固有の意義を持つのかを検討する。特に、「語り」が持っている特徴と、従来の心理学において支配的であった客観主義、普遍主義、

* 北海道大学大学院教育学研究科博士課程（教育臨床講座）

あるいは個体能力（中心）主義の特徴とを比較対照することによって検討する。また、このように「語り」に対するアプローチが、近年の心理学において要請されるようになった学問的状況がいかにして成立しているのかに関しても考察する。

最後に、現在の語り研究が抱えているいくつかの問題点について、主に「共同性」（あるいは「協同性」）という概念を軸にして論じていく。なおこの部分が、本論における議論の中心となる。まず第1に、「語り」はその特徴として、他者との相互行為の中で構築されることを含意しているのだが、同時に「語り」が紡ぎ出される「語りの場」も他者との相互行為によって維持されることについても指摘したい。

第2に、ライフヒストリー場面のインタビュー管理をめぐるライフヒストリー研究者のメタ分析を援用しながら、「共同性」の内実について検討する。つまり、そこでの「共同性」は、決して予定調和的に達成されるものではなく、「ズレ」や「不一致」などの不確定的な要素を含むコミュニケーション過程であることに言及する。

第3に、「共同性」と「語り得ないもの」との間に横たわる乖離と、両者をつなぎ合わせる可能性と不可能性について展望する。戦争、災害、性的虐待に伴うトラウマ、そして障害や病いの経験などといった「語り得ないもの」について、ひとつは、語りにおける「主体」（agency）または自己（self）をめぐる議論（浅野，2001）からの、次に「体験の唯一性」や「過去の一回性」（大橋・森・高木・松島，2002）といった観点からの、社会的構築主義（social constructionism）的な自己論や想起研究に対する批判的意見を参照しながら、主体性（または個性）と共同性の関係について検討する。さらに、「語りの倫理」（Frank, 1995/2002）と「〈出来事〉の余剰」（岡，2000）という観点からの議論を紹介しながら、「共同性」と「語り得ないもの」を、倫理性と他者性という概念で結びつけることの可能性（不可能性も含めて）について論じる。

第1章 「語り」研究の諸潮流

心理学において、個別具体的な状況で個々人が紡ぎ出す「語り」に対する関心が高まっていることは前述した通りだが、まずはじめに、本論において「語り」をどのようなものとして定義するのか明らかにしておくたい。

現在、心理学における語り研究への注目は、社会学、人類学、精神医学、歴史学・歴史哲学、言語学など、種々の隣接領域が現在に至るまで蓄積してきた、語りに関する研究が交差する地点において成立していると言ってもよい。言い換えれば、語り研究はその源流からして、学際的な要素を持っているアプローチである。

ただし、個々人の語りに着目した研究が、必ずしも、一定の術語や概念群を共有しているわけではない。例えば、その個人のそれまでの人生の語りを聞き取ったものである「ライフヒストリー」（あるいは「ライフストーリー」）は、主に社会学や人類学におけるエスノグラフィックな研究で用いられてきた術語である。また、「語り」を「ナラティブ」（narrative）の訳であるとする立場や、「語り」と「ストーリー」（story）を区別したり（野家，1996）、あるいは両者を互換的に用いる場合もある（やまだ，2000；浅野 2001）。ただ、本論ではもう少し緩やかに、包括的な意味で、個々人が具体的な状況で発する言語的実践を「語り」として定義する。そこでは、具体的で、なおかつ実際にその場に居合わせた他者に向けられる「発話」だけでなく、自伝（autobiography）や日記など、テキストの類も「語り」に含める。そして、こうした「語

り」を、研究者個人の何らかの関心に基づいて分析・考察の対象とする研究を、「語り研究」として位置づけることとする。

以下では、語り研究が、どのような学問的・歴史的背景を持つものとして成立しているのか、代表的なものとして、現在の語り研究に大きな影響を与えてきたいくつかの領域を紹介しておきたい。

1. ライフヒストリー

方法論として、そして分析手法として、個人の人生の語りに注目したものがライフヒストリー（または生活史：life-history）である。桜井（1992）は、ライフヒストリー研究を、「個人や集団が自ら解釈し、表現した経験や規定にアクセスする方法」であり、「社会的行為者の主観的見方や社会過程の主観的側面を重視した方法」（p.144）であると定義している。この手法を用いた研究が着実に積み重ねられてきているのが、社会学や人類学、そして民俗学といった学問領域であり、そのなかでも、民族誌（エスノグラフィー）的な研究でしばしば用いられてきた手法である。例えば、社会学においては、非差別部落出身者らを対象とした語り（桜井、2000；好井、2000、2002）、ハンセン病療養所入所者の語り（蘭、1997、2000、2002）、精神障害者とその周囲の人々の語り（藤井、1985）、在日朝鮮人の語り（倉石、2000、2002）、カナダに移住した日本人移民の語り（小林、1992、2000）、沖縄本島のある一集落の移住者の事例研究（石井、1993）、初めて妊娠し出産した女性の語り（中山、1992）など、現在では、ライフヒストリーは確固たるひとつの方法論として確立しつつある。

実際のところ、ライフヒストリーは長い歴史を持つ研究手法である。例えば、19世紀末期から20世紀初頭にかけて、シカゴ学派と呼ばれる一群の研究者たちによって、貧困などの都市問題へのアプローチのために、都市生活者に対してライフヒストリー法が研究手法としてしばしば用いられていた（桜井、1992）。しかしそれが社会的に（あるいは人類学的に）妥当な方法論として認められるようになったのは、それほど新しいことではない。

社会学においては、統計的調査法に代表されるような経験的分析、つまり実証主義的な傾向が強かったために、主観的側面を重視・強調するライフヒストリー分析は「科学的ではない」方法論であり、妥当な社会的調査法としてみなされず、いわば「傍流」の方法論としてしかとらえられてこなかった経緯があった（桜井、1992）。しかし、社会的リアリティが、人々の日常の言語的実践によって構築されるものであるという社会的構築主義（social constructionism）や、エスノメソドロジー（ethnomethodology）のパースペクティブが導入されることによって、ライフヒストリーが社会学におけるひとつの方法論として、徐々に認められるようになっていったのである。また、それだけではなく、過度な実証主義的傾向が排除してきた、個人の主観的リアリティをいかに探究すべきかという、方法論上の反省があったことも見逃せない事実である。日本においては、中野卓が、岡山県倉敷に住むある一人の老女の語りをライフヒストリーとしてまとめた『口述の生活史—或る女の愛と呪いの日本近代』（1977）の刊行がひとつの契機となり、それ以降（つまり1970年代後半以降）、「リバイバル」とも言うべき動きがライフヒストリー研究のなかで生じ（佐藤、1995）、前述したような数多くのライフヒストリー研究が次々と生まれていった。

また、現在では、ライフヒストリーが生み出される場——インタビュアーとしての研究者と、インフォーマントとしての語り手との相互行為によって維持される場——そのような語りの場

そのものが、どのようにして維持、調整されているのかについて、研究者自らが反省的にメタ分析を行う試みもなされている。例えば小林（1992, 2000）は、「共同制作」という観点から、インタビュアーとしての研究者をライフヒストリーの「共同制作者」としてとらえ、ライフヒストリー実践は語り手が自らの過去を解釈するだけでなく、さらにその語りを「共同制作者」としての研究者が解釈しようとするといった、二重の解釈行為を伴うことを指摘している（これらの研究については第3章において詳述する）。

さらに、現在のライフヒストリー研究においては、「歴史的現実」をめぐる議論が存在する。つまり、「事実」(fact)をどのようにしてとらえるかをめぐる議論である。この争点が端的に示されているのが、1995年に刊行された『ライフヒストリーの社会学』における、中野卓と桜井厚の両者による議論である。

中野は、歴史的資料としてのライフヒストリーを重視する立場であり、「ライフストーリーが文学作品ではなく、ライフヒストリーとされるとき編者たる研究者は「真偽」つまり「歴史的現実とみなしうる信憑性」の有無に注意を払う必要があると考えている。現実には「生きられた生において経験したこと」について語っているのかどうかの信憑性であり、生の経験の語りと作り話との区別を軽視してはライフヒストリー、人生の歴史はなりたたない」（同上、p.204）と述べているように、同じくライフヒストリー研究者である Denzin の言う「フィクションとしてのライフヒストリー」という観点に対して疑問を投げかけている。

一方、桜井は、ライフヒストリーは、〈いま—ここ〉という現在の観点から過去を再構成したものであり、さらにそれは語り手と聞き手の相互行為によって構成されるものであると論じる。桜井はそれを「語りとしての生」と呼び、「語りとしての生は、語りの主体が語ろうとする出来事や経験と、語りの主体と直接的には聞き手とのコミュニケーション過程の二つの側面から形成されている」（同上、p.237）と述べる。そして、素朴に事実を語ったものとしてはライフヒストリーをみなさないと主張する。

以上の中野と桜井の議論の争点とは何であろうか。それは「ヒストリー」(history)と「ストーリー」(story)とのあいだに横たわるもの—「事実」の信憑性のとらえ方の相違—であろう。ライフヒストリーという語は両者ともに用いているが、明らかにそれぞれの論の比重は、中野は前者に、そして桜井は後者におかれている。中野の立場の場合、語り手が語るライフストーリーはあくまでも、研究者が構成するライフヒストリーの素材であり、そこでは歴史的現実の相対的な信憑性が要請される。そのため、ライフヒストリーは語り手個人による語りだけではなく、「研究者が近現代の社会史と照合し位置づけ、注記を添え」（同上、p.192）たかたちで構成されるものになる。一方、桜井は、相互行為としてのライフヒストリー実践とライフヒストリーそのものは密接に関連しているものであり、特に研究者の観点から構成されるものであることを強調する。このような違いが、「ライフヒストリー」と「ライフストーリー」とのあいだに厳密な区分を設けようとする中野と、両者のあいだには区分というよりも、むしろ緩やかな移行を見る桜井との立場の違いとして現れてくるのだろう。

これらの議論は、歴史をどのように記述するのかという、歴史叙述の議論ともつながってこよう。この点については、次項の歴史学・歴史哲学における議論をみていくこととしよう。

2. 歴史学・歴史哲学

語るという行為は、過去や、過去の出来事をどのように語るかという問題を内包している。

そしてライフヒストリーの項でも述べたように、どのような構えで過去（の出来事）を構成あるいは記述するのかといったことは、必然的に「歴史」（history）、具体的に言えば、「歴史的事実」をどのようにとらえるのか、という問題と切り離して考えることはできない。この問題に自覚的に取り組んだものとして取り上げられるのが、歴史学や歴史哲学における種々の議論である。厳密に言えば、歴史に関する問題は、個々人の語りを対象とした研究とはテーマが異なる。しかし、現在の語り研究へとつながる、新たな視座を開いたひとつの研究群とも言える。

歴史的事実をどのような観点からとらえるのか、それは大きく分けて2つに分けることができるだろう。ひとつは客観的な事実として歴史はとらえるのか、それとも人々による解釈の産物であるのか、という対立である。片桐（2003）は、前者を「出来事としての歴史」、後者を「記述としての歴史」と分類した。前者は、人々とは独立に「客観的な」歴史的事実が存在するという立場であり、いわば実証主義的な傾向を帯びたものである。一方後者の場合、歴史的事実とは人々によって「現在における観点をとおして解釈されたもの」（片桐、2003、p.136）であり、歴史的事実の構築性を主張する。

現在、歴史学・歴史哲学の分野においては、このように歴史的事実の構築性、片桐（2003）の言葉を借りれば、「記述としての歴史」観が主流になっている。このように、歴史哲学の分野における、客観的な歴史像から歴史の構築性へのベクトルの転回は、Mitchell, W. J. T. が編集した『物語について』の中のいくつかの論文に見いだされる。この『物語について』は、1979年にシカゴ大学で開催されたシンポジウム、「物語—シークエンスの幻想」におけるパネリストたちのディスカッションをまとめたものである。そこで歴史哲学者である White, H. は、『歴史における物語性の価値』において、「サン・ガル年表」を例にあげ、次のように語っている。

そこには、現代の歴史家が記録に残っている事件を評価し序列化するにあたっては、決して普遍的な視点ではなく、文化に固有な視点から行っていることが表われているのだ。このように文化あるいは集団にとっての重要度について事件の評価を行おうとする欲求、または衝動があればこそ、現実起きた事件の物語形式での表現が可能になる。

（ヘイドン・ホワイト『歴史における物語性の価値』、邦訳、p.29）

さらに White は、ヘーゲルの『歴史哲学』からの一文を引用しながら、このような物語形式による表現への欲求や衝動を、「事件の重要度を評価するための唯一の尺度である社会制度」（同上、邦訳、p.30）や、「事件に相対的な位置づけを与え、倫理的・道徳的な意味づけを与える社会的な中心」（同上、邦訳、p.31）というように、モラルや権威性に求めている。モラルや権威性に、物語性による人間の歴史叙述への欲求の源泉を見ることについては、同書の White に対するコメントにおいて Mink, L. O. が批判的な応答をしているが、少なくとも、歴史叙述は物語という形式によって達成されるということ、そして「客観的事実」としての歴史的事実ではなく、あくまでも文化や集団といった、ある特定のポジションや観点から構築されるものとしての歴史的事実を White は想定しているのである。このことを個々人による語り行為にまで拡張してみよう。過去（の出来事）も、それ自体が独立したかたちで存在しているのではなく、現在というある特定の観点から構築されるものである。そういった意味では、歴史の叙述にせよ、個々人の語りにせよ、いずれにしても、物語る行為であるという点で共通なものである（片桐、2003）。言い換えれば、「客観的な歴史的事実が記憶の母胎なのではなく、逆に記憶と想起

の営みこそが歴史的事実の母胎」(野家, 1996, p.127)であり、歴史的事実は、その歴史のただなかで生きている市井の人々によって物語られることで、はじめて歴史的事実たりうる地位を獲得することができるのだ。

また、歴史学・歴史哲学の議論にみいだされる、もうひとつ重要な点は、歴史叙述には必然的に、共同性の問題がつきまとうということである。野家啓一(1996)は『物語の哲学』のなかで、歴史について物語ることは「物語行為」とあるという観点から、歴史叙述と共同性の関係に触れている。野家は、同書において6つの「歴史哲学テーゼ」を提示しているが、そのなかの第3のテーゼとして、「歴史叙述は記憶の“共同化”と“構造化”を実現する言語的制作(ポイエーシス)にはかならない」(同上, p.147)とする「歴史の物語論」を唱えている。歴史とは、Dantoの言う「理想的年代記」の作者によって超越論的・俯瞰的視点から記述されたものではない。そうではなく、人々が長い歴史のなかで絶えず語り継いできた「無数の物語文からなる記述のネットワーク」(同上, p.12)なのである。名もなき個人による無数の記憶や経験が、この「記述のネットワーク」に編み込まれるためには、物語るという行為によって言語化されなければならない。そして、言語化された個人的な記憶や経験が、公共の空間に流通することによって、共同体の記憶や経験として沈澱し、最終的には「歴史」というかたちに昇華していくのである。明らかに、そこには共同性の機制が働いていることが見てとれよう。野家はさらに、このような過程を、歴史を語るとは「記憶の共同体」に参加することになぞらえている。そもそも、ある個人的経験や記憶を想起し、語るということはきわめて共同性の色合いが濃い営みである。そこにその語りを聞き取ろうとする聞き手(他者)が存在しなければ、自らの経験を語るという行為も存在し得ないだろう。逆に言えば、そのような自らの経験を語るという営みによって、人々は「記憶の共同体」または「想起の共同体」へと参加していくのであり、そしてそのような営みが絶え間なく反復されていく限り、「記述のネットワーク」としての歴史は、「絶えず織られつつあり、そこには新たな物語文の糸が次々と付け加わっていく」(同上, p.168)のである。

3. ナラティブ・セラピー

自らの実践上の興味関心やプラグマティックな理由から、治療場面において個人が紡ぎ出す語りに注目してきたのが、臨床心理学や精神医学に携わる人々であった。精神分析の祖であるFreudにはじまり、数多くの臨床家たちが、それぞれ流派や立場の異なりはあるものの、クライアントの語りを(治療を進める上での戦略として)分析の対象としてきた。そして、そのなかでも現在、治療法というだけにとどまらず、個人の人々の語りに対する有力なアプローチとして脚光を浴びているのが、「ナラティブ・セラピー」(narrative therapy)と呼ばれるものである。このナラティブ・セラピーは、1950年代に誕生した家族療法にまでその源流を求めることができる。

それまでの精神医療、あるいは臨床現場では、例えばある個人が何らかの精神的変調をきたした場合に、その個人の内部に全ての問題を帰属させようとする傾向が強かった(例えば、個人の認知の歪みが問題のもとである、というように)。しかし、家族療法の立場では、精神的変調の原因を、病いを患った人間(の内部)のみに求めようとするのではなく、クライアントが属する家族全体を、ひとつのコミュニケーションシステムとしてみなし、そのシステムに歪みやねじれが生じた時に、システム内にいる個人に「問題」とみなされる状況が生じるのだと考

えた。そして、このシステムに介入することが治療の主眼になるのである（小森・野口・野村，1999；浅野，2001）。ちなみに、初期の家族療法に大きな影響を与えたのが、「ダブル・バインド」論で有名な Bateson, G. である。

このようなシステム論的アプローチは、しばらく家族療法の主流となるが、1980年代後半からこのアプローチに対する批判が起こりはじめる。ひとつは、そのようなシステムを自明のものとしてみなすことによって、システムの固定性や安定性が必要以上に強調されてしまうということ、そして特権的な専門家としてのセラピストが、「観察者から独立した現実」（浅野，2001）を眺めるがごとく、外部から（クライアントを含む）システムを見る「セラピストークライエント」という固定化された垂直的關係などの問題点が指摘されるようになった。そして批判者たちは、システム論的家族療法から、言語に注目する解釈学的なアプローチ、つまりナラティブ・セラピーと称するものへと急速に関心を移していった。これらの関心は、ポストモダニズムや社会的構築主義から大きく影響を受けたものであり、「物語論的転回」（narrative turn）と呼ばれる、当時の学際的な思想的背景があったことがうかがえる。

それでは、ナラティブ・セラピーの核心はどういったところにあるのだろうか。ひとつは、「意味」（meaning）への注目であり、それは会話において、クライアントとセラピストとの会話によって共同的に構成されるという視点である。Anderson と Goolishian（1992/1997）は、サイバネティクスの機械論的アプローチに基づく家族療法では、個人の経験を扱う余地はほとんどなく、一方では、素朴な構成主義に基づくモデルも、意味を生成する存在としての人間をとらえることが困難であるとした上で、次のように語る。

われわれの治療的立場は急速に解釈学的立場へと移行した。これは、他者との会話のなかで生み出され経験される「意味」に注目する見方である。…（中略）…われわれのセラピーは（変化するシステム）として理解され説明されるようになった。それは、語り、言葉、会話の思いがけない展開のなかにのみ存在するものであり、意味論と物語論の領域に根ざすものである。人の行為は社会的な構成作業と対話を通じて作り出される現実のなかで営まれる、という見方に現在のわれわれは立っている。（Anderson&Goolishian『クライアントこそ専門家である』、邦訳、p.62）

この考え方は、明らかに「社会的行為の一形態としての言語」（Burr, 1995, 邦訳, p.11）、つまり、人々の言語的相互行為によって、世界が構築されるという理論的前提を有している社会的構築主義と非常に親和性が高い議論である。さらに続けて、彼らは以下のように述べる。

この見方によれば、人は他者とともに作り上げた物語的な現実によって自らの経験に意味とまとまりを与え、そうして構成された現実を通して自らの人生を理解し生きる。それは、人の言語と言語の使用（言説）にかかわる世界である。（同上、邦訳、p.62）

人々は物語ることによって、自分の過去の経験を、時間的流れのなかに配置し、意味を与えて構造化することによって、自らの人生を物語として構成していく（あるいはそうせざるを得ない）存在なのである。ナラティブ・セラピーは、ふだん、無意識的にわれわれがおこなっているこれらの言語的実践を、治療場面という人為的な場面において明示化する手法でもあると

言えるのではないだろうか。

そして、ナラティブへの着目を志向する研究者たちの中でも、AndersonとGoolishianは「治療的会話」という中心概念を用いて、対話的視点に基づく治療プロセスを想定する。「治療的会話」とは、何らかの「問題」についての対話を通じて、理解や発見を共同で探索していくプロセスのことを指しているが、そこでは、従来の治療場面で広く見られた、「セラピスト(専門家)―クライアント(素人)」という非対称的(あるいは垂直的)な権力関係に基づいた治療プロセスは否定されるものとなる。つまり、「治療的会話」に基礎を置くならば、セラピストの役割は、あくまでもクライアントの会話パートナーとしてのそれであり、「『相手とともに』語り合う」(同上、邦訳、p.67)ことによって、「セラピストとクライアントは、新しい意味、新しい現実、そして、新しい物語を共同で開発する」(同上、邦訳、p.67)ことになるのである。この視点に立つならば、セラピストも「治療的会話」という会話システムの一部であり、「問題」を抱えたシステムを外部から超越的に観察できる存在ではないということがナラティブ・セラピーの核心のひとつとして読みとることができる。これは、会話システムに埋め込まれている対話パートナーとしてのセラピストの役割を強調したものだといえるだろう。そのようなセラピストの姿勢を、AndersonとGoolishianは「無知の姿勢」と表現する。

ナラティブ・セラピーを特徴づけるものとして、第3にあげられる点は、会話において、セラピストとクライアントが「物語」という媒介手段を用いることによって、クライアントが新たな自己を構成していくという点にある。具体的に言えば、クライアントにとってそれまで好ましいものではなかった「自己物語」(それはしばしば「ドミナントストーリー」とも呼ばれる)を、セラピストとの対話のなかで新たな意味や現実を発見することによって、新たな「自己物語」に「書き換えていく」ことである。このような観点から、ナラティブ・セラピーの実践を行っているのが、WhiteとEpston(1992/1997)であり、それは「書きかえ療法」(Re-authoring Therapy)とも呼ばれる。ナラティブ・セラピーにおけるポイントのひとつとして、自己の構築は、物語ることと切り離せないということがあげられるが、いったん物語として語られた自己物語は、決して固定的なものではなく、「不確定な要素」(同上、邦訳、pp.146-148)を含んでいるものであるからこそ、「書きかえ」の可能性がはじめて生まれるのである。クライアントにとって、例えば「幼児期に虐待された」という経験は確かにひとつの事実である。しかし、セラピストとの対話によって、「ユニークな結果」と呼ばれる、新たな可能性を示すもうひとつの解釈を発見することによって、「ドミナントストーリー」に拘束されていた従来の「自己物語」が、クライアント本人が生きやすくなるような「自己物語」へと「書きかえ」られていくとされている。

浅野(2001)によれば、ナラティブ・セラピーを志向する研究者・臨床家たちのなかでも、AndersonとGoolishianのように社会的構築主義的な「会話的アプローチ」に基づく立場と、一方でWhiteとEpstonのように、「ユニークな結果」といった「語り得ないもの」に注目し、クライアントの従来の自己物語の書きかえを重視する立場というように、微妙にそれぞれの立場は異なっている。しかし、今まで述べてきたように、少なくとも以下の3点が、ナラティブ・セラピーの理論的特徴としてあげることができ、そして現在の語り研究にとって貴重な知見であると言えるだろう。ひとつは、対話において意味が共同的に構築されるということ、そして物語るという行為によって、自己物語、つまり一貫性を持った自己を構成し、それは「書きかえ」が可能であるということ、さらに会話システムに埋め込まれている存在として

のセラピストを強調するといったこと。これらは、セラピーという特殊な場面（そのように表現されることは、彼らにとって不本意かもしれないが）に限らず、具体的な個々人の語りに注目する語り研究に示唆するところは、非常に大きいと思われる。

第2章 心理学における語り研究の意義

1. 心理学における語り研究前史

心理学でも、前述してきたような、個人の語り行為に全く注目してこなかったわけではない。ナラティブ・セラピーは、臨床心理学のフィールドにその出自を持つものであり、厳密に言えば、本章の議論に含めるべきものかもしれない。しかし、結果的には、臨床心理学や精神医学以外の一般心理学は、実証主義的な方向へと進んでいったので、むしろその方面の動きが、現在の心理学で見られるような、ナラティブへの着目という傾向に影響を与えたとも言えるのである。実際、日本において、比較的早い時期から「物語」という観点から個人の語りに注目していたのは臨床心理学や精神医学であり、その一例として波平（1992）や森岡（1994）の研究があげられる。

ところで、世界ではじめて「実験心理学」を構想し、確立した心理学者は Wundt だと一般的に言われているが、彼は、人間の意識に直接にアクセスするための手法のひとつとして、内観法を採用した。つまり、自らが体験する意識の過程を主体自らが観察することによって、本来はアクセス不可能であるはずの意識体験や心的現象を考察することが可能になるという立場である（岩本，1995）。Wundt は内観法を、現在の実証主義的心理学とは意味合いが異なるが、あくまでも実験研究的な手法のひとつとして用いていたのであり、意味の構成や、過去の変容、自己の多様性という前提を持つ現在の語り研究とは決定的に異なるが、それでも表面的には、個人の内的過程を表現するものとしての語りに注目したことは事実である。

しかし、内観法は熟練した一部の被験者のみにしか適用できないということ、そして内観によって得られたデータが科学的に妥当性のあるものかどうか、信憑性に疑いがあることなどの批判が、当時の研究者から浴びせられた。結果として内観法は、きわめて主観的で、客観性を旨とする実証主義的傾向の流れのなかに打ち消されていった。その後、実証主義的傾向を強めていった心理学は、「行動主義心理学」、「情報処理アプローチ」など、その名前を変えながらも、個人の語り行為、特に具体的な場面で人々が紡ぎ出す語りを分析の対象として取り扱うことを、妥当な方法論としてみなしてこなかった。

以上あげてきたような心理学は、個人の認識活動の分析に、その精力の大部分を注いでいた。例えば、情報処理アプローチをとる認知心理学の場合、コンピューターの情報処理プロセスというメタファーを用いて、個人の認知を分析するというように。確かに、個体に分析の重点を置いてきた研究にも一定の成果があったことは言うまでもない。しかし、個体中心主義的なアプローチが見落としてきた側面——社会、文化、歴史、共同体(共同性)、局所性、具体性、道具、時間、意味——に注目しなければならないと主張する動きが、1970年代後半から心理学のなかで活発になっていった。

そのひとつとしてあげられるのは、道具としての言語と思考の関係、そして語義と意味との関係に着目したロシアの心理学者 Vygotsky, L. S. による社会歴史的アプローチの再評価であるし、個体中心主義的な情報処理アプローチの範疇を超えて、アーティファクト（人工物）の

配置や、その使用に注目した状況論的アプローチなどがあげられる。また、従来の記憶理論とは異なり、過去の変容性や、記憶とアイデンティティとの関係性について言及した自伝的記憶研究（佐藤，1998）や、想起の社会性を強調した共同想起研究（松島，1996；佐々木他，1996）なども、以上の動きと呼応していると言ってもよいだろう。

これらはひとつのまとまった流れのようにも見えるが、細かい部分においては理論的な対立や拡散を含んでいる。ここではそれらの理論的差異には触れないが、確かに言えることは、これらの新たな潮流が、社会文化的な側面や局所性・具体性にこだわり、それらの解明に向かおうとしていることは共通している。そして、それらの動きの一端として、そして前述した隣接領域における動きからも影響を受けながら、個人の語りを志向する動きがはじまったと言える。

例えば、実証主義的な傾向が強かった従来の心理学に対する批判的雰囲気を代表したものとして、浜田（1992）の次の文章をあげることができる。

自らの生活体験をそれぞれ一つの「物語」として体験し、記憶し、表現し、理解している…（中略）…人間の世界は、つねにそうした「物語」性を帯びているのです。

とすれば、心理学においても、この複数の主体のあいだの「物語」をこそモデルにして、あらたな「人間の構図」を組めないものでしょうか。

（浜田寿美男『発達心理学再考のための序説』，p.151）

浜田は、従来の発達心理学において支配的であった「個体中心主義」で「個体能力主義」的な発達観あるいは能力観に対して異論を唱えている。これら支配的なパースペクティブは、ナラティブ・セラピーで言えば、発達心理学における「ドミナントストーリー」と言うべきものであろう。そこで浜田はそれに対峙するものとして、「物語」性を基本にした、人間の生活世界の記述という新たな方向性を提案する。それは、「個体どうしの関係を軸にして、その展開を一つの意味の流れとして描く心理学」（同上，p.151）であり、「人どうしが織りなす物語の流れのなかで人間を捉え」（同上，p.151）ようとする試みでもある。浜田は表だって、語り研究を志向しているとは述べていないが、現在の心理学（特に日本）における語りへの着目を当時から既に先取りしていたとも言えよう。そしてさらに、浜田は「意味」にも注目する。

物語はつねに複数の人々が織りなす意味の脈絡です。そこでは個人があって物語が成り立つのではなく、反対に物語の舞台がまずあって、そのうえに個々の人物が登場してきます。つまり、人間の現象はすべて、人と人との関係という全体から出発することになります。（同上，p.156）

まず、「物語」性による人間の生活世界の記述の前提として、「意味」の存在がクローズアップされる。そしてその意味は、人間の心的世界から独立して存在しているのではなく、人々によって「織りなされる」ものである。これは、現在流通している語りへのアプローチが理論的前提として有しているエッセンスのひとつでもあろう。それでは、以下数点にわたって、語り研究が共通に有している理論的前提を列挙していこう。

2. 心理学における語り研究の意義

(1) 意味の構成

以上のような浜田の志向性と同一地平を共有しているのが、Bruner, J. の物語論である。Bruner (1987, 1990/1999) は人間の心的世界をとらえるための道具立てとして、フォークサイコロジを提唱し、そのなかで「意味」が公共的な折衝によって共有されるものであることを指摘する。そして Bruner は「文化」という概念を持ちだして、「個人だけに基づいて人間心理学を構成できないのは、人類が文化の中に参加し、文化を通して心的能力を実現するから」であり「世界というものを、個人それぞれの方法によって処理される情報の冷淡な流れとして論じることが、個人がどのように形成され、どのように機能するかを見落とすことになる」(『意味の復権』, 邦訳, p.17) と主張することによって、従来の心理学が、個人主義的な表現で思考する傾向があったと批判する。さらに、そのような傾向のもとでは、文化のなかで人々がどのように意味を構成していくのかを見落としてしまうのであり、文化という概念装置を結びつけることによって、意味の生成過程をあり方を探究することができると主張する。

心理学は、人類を文化に結びつけている意味生成や意味使用の過程を中心にして組織されなくてはならない… (中略) …文化に参加することによって、意味は公共的で、共有されるようになる。(ブルーナー『意味の復権』, 邦訳, p.17)

ここでは、明らかに意味が、公共的な空間に開かれているということ、そして公共的空間に流通することによって、意味は生成されて構築されるものであるということが示されている。つまり、個々人が語ることによって(言語的相互行為によって)意味の生成や構築が行われるのであり、意味は個人を離れて存在することは不可能である。そこでは、語を受け取り、その意味を解釈するといった個体内部の情報処理メタファーに押し込めるものでもなく、あるいは社会や文化が意味を一方向的に規定して、人々がそれらを使用するといった類の考えに収斂させるものではない。

(2) 行為(相互行為)としての語り

語りとは、単に、意味が付与された発話を他者に伝えるものではない。それは他者との相互行為を通して構築されていくものである。Bakhtin(1986)は、発話の持つ本質的特徴として「宛名性」をあげ、他者の何らかの反応を予測しない発話は存在しないことを指摘している。その発話のみが、文脈から独立して存在しているのではなく、あくまでも他者(の応答)の存在が前提となっているのである。例えば、ライフヒストリーのように、実際に語り手と聞き手が、具体的な対面的発話状況に居合わせるといった場合だけではなく、テキストや小説、さらには自伝のように、テキストの作者(つまり語り手)の現前に、聴衆や聞き手が実際に存在しない場合でも、それらの作者は不特定多数の聞き手や聴衆が存在していることを絶えず想定しながら創作(あるいは語って)しているのである。

そして、相互行為性を持った語りは、語られたあるひとつの時点で固定されたままではなく、次々と変化していくものである。かといって、それらが流動的なものであり、際限なく拡散してしまうものでもない。「共同行為」(joint acts)としての発話行為を強調しているのが、イギリスの言説心理学者 Shotter(2000)である。Shotter は、「対話的に構築された活動は、動的で、

連続的に変化、変動、鼓動するといった特徴を持ち、ある時点でのその構造は、別のある時点では全く異なるものになってしまう。」(p.108)と述べ、対話に基づく活動の変動性について述べている。一方で、個々の発話は、このような多様性や異種混交性に基づく「遠心的」傾向のみならず、ある一定の秩序を要求するような「求心的」傾向も同時にあわせ持っているのであると Shotter は主張する。

(3) 自己構成としての語り

上で述べたように、語ることは他者（あるいはオーディエンス）の存在を想定した相互行為的な営みである。繰り返すが、他者が存在しなければ、そもそも語るという行為は成立しない。そして、そのような他者の存在を想定して語ることは、自己(self)あるいはアイデンティティ(identity)を構築する営みでもある。ナラティブ・セラピーの基礎にある物語論的アプローチは、特に物語に媒介された相互行為を通して、自己が構築されることを重視する。そして、このように自己物語を語るという相互行為によって構築された自己は決して「自閉的、予定調和的なものではなく、相互行為に開かれており、相互行為において呈示されるとともに、その付与のあり方は、対立的で交渉的な過程の中で初めて考えられる」(片桐, 2003, p.8)。こういった固定的ではない、柔軟な自己の構築のあり方に注目したのが、第2章でも述べたように、White と Epston (1992/1997) が提唱した「書きかえ療法」、つまり自己の語り直しである。

また、保阪 (1998) は、従来、教室学習場面においては、「教授—学習」という支配的なディスコースのもとにいてと思われていた子どもたちも、それぞれの「戦略」を用い、ある出来事に関する語りによって、行為の動機とアイデンティティを、教室学習の場面場面においてそのつど物語的に構成していることを、参与観察から明らかにしている。言い換えれば、教室学習場面という局所的な文脈においても、子どもたちのアイデンティティが、教授—学習という支配的なディスコースのもとで常に固定化されているわけではない。教室内の他者（教師や他の子どもたち）に対する自己の呈示は、その時々との関係性によって異なる。つまり、子どもの自己のあり方（アイデンティティ）は、他者に向けられた語りを通して、絶えず再構成されていくことを保阪は指摘している。

(4) 時間性を伴ったものとしての語り

これは自己またはアイデンティティの構築とかかわってくる点である。つまり、自分の過去の経験（出来事）を、意味あるものとしてそれぞれを相互に関連づけ、そしてそれらの経験を時間的に一定の順序をもって配列すること（時間的構造化）によって、自己やアイデンティティの統一性や一貫性を感じることが可能になる。

例えば、記憶に問題を抱える高次脳機能障害者の姿を想像してもらいたい。記憶障害にも程度の差はあるだろうか、少なからぬ人々が短期記憶に非常な困難を抱えている。基本的に、事故以降の記憶はほとんど蓄積されることはなく、次々と更新されていくことになる。そうなった場合、事故以前の記憶はともかく、事故以降の自己の経験のある一定の時間的秩序に位置づけていくことが不可能になるだろう。とすれば、自己やアイデンティティの一貫性を感じることに非常な困難をきたすことが考えられる。テレビのドキュメンタリー番組などで、彼らの姿を時折目にすることがあるが、その姿が非常に頼りなげに見えるのは、もしかしたらそのような理由があるのかもしれない。

また、野家（1996）は、物語行為の観点から、物語文を「時間的前後関係にある複数の出来事を一定のコンテキストの中で関連づけるような記述」であり、「コンテキストが変化すれば、過去の出来事の意味づけもまた変わらざるをえない」（p.83）とする。つまり、人は生きている限り新しい出来事に出会い、その結果、物語文としての自己物語は、新たな出来事を再記述していくことになる。その際、再び複数の出来事を一定のコンテキストに関連づけるという作業が行われるわけだが、これらのプロセスが反復され続ける限り、時間軸への出来事の配列も暫定的なものであり続け、物語文としての自己物語が完結するということもあり得ないのである。

3. なぜ語り研究が心理学において要請されているのか

本章ではこれまで、なぜ心理学において、個人の語りに注目した研究が増えてきたのか、隣接諸領域からの影響も踏まえながら、主に学問的な意義に注目して論点を整理してきた。しかし、心理学という学問の営みは、社会や文化、さらには歴史的な文脈から独立して成り立ち得ない。つまり、心理学における語り研究への志向の高まりと、心理学に対する社会の要請がシンクロしていることがうかがえる。ここでは、語りの学問的意義に関する議論からいったん離れ、社会における心理学の位置づけが、心理学における現在の語り研究への意識の高まりと結びついている可能性について検討する。

小林多寿子（1995 a, 1995 b）は、1980 年代のわが国において、自分のそれまでの人生を「自分史」としてまとめようとする一般の人々が急増した背景を分析したが、その際、自分史執筆マニュアルの制作、自分史が出版され流通する経路の整備、そしてそれに伴う自分史の読み手の増加が、さらなる自分史の書き手を増加させていった過程を明らかにしている。結局、自分史ブームを機にして、数多くの人々の自分史が、消費される商品として市場に流通するシステムが成立したわけだが、このことを小林は「物語産業の誕生」と称している。「物語産業の誕生」の背景には、もちろん自己（の過去）について積極的に外部に向けて語りたいという欲望を持った人々が増えていったことがあげられるだろう。そして、そのような欲望を持った人々によって語られた自分史が、それほど違和感なく受け入れられる素地が、1980 年代以降のわが国社会では醸成されていたことも示しているよう（小林、1995 a, 1995 b）。

また、日本における自分史ブームに限らず、欧米では、限りなく私的な側面が強い営みである、自分自身の性体験や性的嗜好について、テレビでのトークショーなどのメディアで語ったり、研究対象者として自ら進んで研究者に語ろうとする人々がえていることを、Plummer（1995/1998）はその著書、『セクシャル・ストーリーの時代』のなかで指摘している。Plummer は、当初、ある学術調査団体から「性的多様性についての実証研究」という名目で、「小児性愛者」「サドマゾヒスト」などといった様々な性的嗜好を持った人々に対する調査を依頼され、あらゆるタイプの性的嗜好者のライフヒストリーを順調に集めることができた。しかし、結局のところ、それらのデータは整理されず、当分の間、調査結果として日の目を見ることはなかった。なぜならば、Plummer がいぶかしく思うほどに、様々な性的嗜好を持った人々は、自ら進んでセクシャル・ストーリーの収集に協力してくれたからである。こういった状況に違和感を抱いた Plummer は、「過去、数十年間にわたっておこなわれた性科学研究の何百という調査のストーリーは、たんなる私たちの性生活の反映ではなく、その構築に積極的な役割を果たしているのである」（同上、邦訳、p.24）と結論づけているように、最終的に、種々のセクシャル・ストーリーを収集したいという研究者の欲望が、むしろ欧米社会におけるセクシャル・ストー

リーの公共的な流通を促進させたという結果の一部として機能していたことを自覚したのである（長谷，2000）。そして、個々のセクシャル・ストーリーの内容の検討よりも、「社会的世界に埋め込まれた社会的行為」（同上，邦訳，p.34）としてセクシャル・ストーリーを見ることに重点を置いたのが『セクシャル・ストーリーの時代』なのである。

自分史のブームにせよ，性的な事柄が以前にもまして公の場で語られるようになったにせよ，従来ならば，自己を語るためのリソースとして求心力を持たなかったはずの私的な事柄が，現在では自己物語を構築するための中心的素材となっていることが，いずれの場合においても共通していると言える。片桐（2000，2003）は、「私化現象」という側面から，個々人の語りが限りなく私的領域に基盤を置くようになっている現象について考察を行っている。従来は，国家による歴史や，共同体における集合的記憶が，自己を語るための準拠枠として機能していた。しかし現在では，公的領域に存在するそれらの準拠枠は，解体もしくは縮小する方向へと向かい，その代わりに「各人の個人誌を基盤とするミクロな物語が，自己物語を構築するための核となる」（片桐，2003，p.198）ような「物語の私化」が生じていることを片桐は指摘している。

そういった意味では，本論でも頻繁に取り上げられるナラティブ・セラピーが，近年臨床心理学や精神医学の領域で受け入れられてきた背景についても，社会的文脈との関わりで検討する必要があるだろう。第1章でも述べたように，従来の精神医療場面で見られた「セラピストークライエント」という固定的な権力関係の見直し（対等な参加者による「治療的会話」）がナラティブ・セラピーではなされているといった肯定的な側面ももちろんあるだろう。しかしその一方で，社会学者である森（2000）が述べているように，「心理学や精神医学の知識や技法が多くの人々に受け入れられることによって，社会から個人の内面へと人々の関心が移行する傾向，社会的現象を社会からではなく個々人の性格や内面から理解しようとする傾向，および，『共感』や相手の『きもち』あるいは『自己実現』を重要視する傾向」（森，2000，p.9）がある「心理主義化社会」が，自己物語や自己の語り直しをテーマとしているナラティブ・セラピーをある意味で要請しているのかもしれない。浅野（2001）は，小林（1995 a，1995 b）による研究を引用しつつ，自己の主題化，つまり自己についての語りは，現代では高度消費社会の商品であり，さらに物語療法の機能と自己語りへの欲望が共振していることに無自覚なまま，安易に理論を採用するならば，理論による対象の分析が，単に対象の欲望（つまり自己語りへの欲望）を反復するだけになりかねないと論じている。

ここで列挙した自分史への欲求，セクシャル・ストーリーの他者への開陳，そしてナラティブ・セラピーにとどまらず，現代の社会は人々に対して，常に自己を語らせるように仕向けていると言ってもよいだろう。このような自己についての語りを要請する時代状況や社会的文脈について，どれだけ（語りに関心を寄せる）研究者自身が自覚できるのが，おそらく今後問題になってくるのではないだろうか。研究者が，対象から距離を置いたり，社会的文脈とは全く無関係であり，全知的な分析者として振る舞うことは，語りという行為が有する理論的前提から言っても不可能なことである。Plummer（1995/1998）が述べているように，「社会学者は，観察され，分析され，最終的には書かれるというプロセスそのものの一部なのである。」（邦訳，p.23）。

第3章 語り研究におけるいくつかの課題

1. 語りの場における共同性

現在、心理学において、個別具体的な状況における個々人の語りに注目する研究が、徐々に見いだされるようになってきていることは、これまで述べてきたとおりである。そこで、語り研究を志向している各論者にほぼ共通している見解のひとつを簡潔にまとめるならば、それは他者（聞き手）に向けられていて、他者との相互行為の中で構築されていく、という点に見いだすことができるだろう。

例えば、やまだようこ（2000）は、ライフストーリー研究の観点から、人々が語りの場において紡ぎ出す人生の物語を、「共同行為（joint acts）としての物語」としてとらえている。

人生の物語は、シンボリックな文化システムのなかで語る者と語られる者とのあいだの相互行為として行われる…（中略）…語り手と聞き手の相互行為からストーリーは生み出されるが、それはその場の状況的文脈によって変化する。したがって、語り手の物語は、語る相手によっても、場の雰囲気や状況によっても影響される。また、語り手と聞き手は、一方的な関係ではなく、対話的關係であり、共に物語生成にかかわる。

（やまだようこ『人生を物語ることの意味』，pp.154-155）

以上のやまだの指摘が含意しているものは、ひとつは語りの「共同性」（あるいは「共同制作性」）である。語り（やまだの場合「人生の物語」ということになるが）は、対面的な言語的相互行為にせよ、テキストなどの筆記されたものにせよ、それらは語り手に相対している聞き手、あるいは書き手が想定する読者など、特定・不特定のいずれにもかかわらず、他者に向けられることを志向しているのである。さらにもう一点、やまだの議論から明らかになるのは、語りとは、一方的な関係ではない、対話的な関係に基づいて生み出されるということである。このことは、Bakhtin（1986）の対話論とほぼ重なりあう。

発話は、言語コミュニケーションの先行の環だけでなく、後続の環ともむすびついている。発話が話者によってつくられるとき、後続の環はもちろんまだ存在していない。けれども発話は最初から、ありうべきさまざまな返答の反応を考慮して構築されるわけで、本質的には、それらの反応のために発話はつくられる

（バフチン『ことば 対話 テキスト』，邦訳，p.180）

これは、発話を持つ本質的な特徴である「宛名性」について述べた有名な一文であるが、ここでBakhtinは、他者の何らかの反応を予測しない発話は存在しないと主張する。Bakhtinの対話論は、直接、ナラティブに言及したものではない。しかし、現在の語り研究に示唆するところは大きいであろう。

このような、（最大公約数的なものではあるが）語りについての理論的前提を共有したかたちで、心理学においても個々人の語りに注目した研究がなされるようになってきているのは確かである。前章でも述べたように、従来の心理学が、人間の心的活動をあまりにも個体内部に閉じ込めすぎてしまい、結局、実際の人間活動のリアリティ（ライフストーリー研究においては

「生の意味」とも呼ばれたりするが)を見失ってしまう隘路に陥ってしまったという反省が、これらの動きの背景にあることがうかがわれる。

しかし、個々人の語りを志向、いわばナラティブ・アプローチを標榜する研究の中には、あたかも、語り手から「真実の語り」が引き出されたかのように、データとしての語りを処理するものが見られる。例えば、研究者が、自身のある特定の問題意識に基づき、そしてそれに沿ったかたちで、語り手から語りを「引き出し」、それらをいくつかのカテゴリーに分類したりするといったものである(例えば、データ対話型理論に基づく、ボトムアップ的なカテゴリー分類など)。そして最終的には、語りの場における聞き手の語り(問いかけや応答)はデータの記述から消え、研究対象者となる語り手の語りだけが、あたかも独立して「取り残された」モノローグのように、非常にスタティックに記述されていたりする場合がある。もちろん、研究者の興味関心、あるいは論文の紙幅などといった事情から、分析単位を「細かく」区切るために、分析上、個的に断片化された語りに焦点化せざるを得ない事情もあるだろう。また、このような分析手法を、語り研究におけるひとつの選択肢としてとらえることも可能であろう。

しかし、個々人の語りを分析対象として志向する研究の多くは、前章で述べたような理論的前提の上では、語りの共同性が重要視されているものの、実際、各々の研究者による語りの記述を見てみると、最終的にそれらは、非常に個的な達成物として記述されてしまっていると感じざるを得ない。

そこで、いくつかの問題が問われなければならないだろう。それは、語り研究において、インタビューにせよ聞き手にせよ、研究者にとって語りの場がどのように意識されるべきにかにかかわってくる問題である。具体的には、語りの場における「語り手―聞き手」関係と、「共同行為としての語り」、あるいは「共同構築としての語り」と言った場合の「共同」(あるいは「共同性」)の内実について問われなければならない。さらに言い換えるならば、やまだ(2000)が言うような「対話的關係」とはいったい何なのか、という問いにもかかわってくるはずである。これらの点について、心理学は、どれだけ自覚的・反省的であったのかどうかについては、疑問を呈さざるを得ない。最終的には、語りの場からも、さらにはそれらを取り巻く社会的・歴史的文脈からも孤立してしまった個人が、「真空の場」としての語りの場において、個的な達成物としての語りを紡ぎ出していくという、そもそも語りを志向する研究が、当初抱いていたはずの問題意識とは全く逆の方向に向かってしまっているようにも思われるのである。

心理学は、個別具体的な個々人の語りに着目するようになった学問としては、比較的后発の領域に属している。ここで、これらの問いについて考えるさいに、語り研究が心理学よりも蓄積されている、先行する他の学問領域から学ぶことは非常に多いのではないだろうか。

例えば、語りの場における「語り手―聞き手」の関係性と、それにまつわる権力性について、心理学よりも比較的に自覚的・反省的分析を行っているのは、ライフヒストリー(またはライフストーリー)研究を行っている一部の社会学者たちである。彼らは、ライフヒストリーを聞き取るという研究者自身の行為も、それが行われる語りの場を取り囲んでいる研究上の関心といった文脈や、さらには社会的・文化的文脈に埋め込まれているひとつの実践としてとらえ、反省的に考察する必要があると主張している。

例えば、小林多寿子(1992, 2000)は、自らが行ったライフヒストリーの聞き取り場面を、「語り手―聞き手」関係におけるコミュニケーションのあり方に焦点化することによって、反省的にメタ分析を行っている。そもそも小林は、アメリカに移民したが、第二次世界大戦中に、

国内の他地域に強制移動させられ、そしてカナダのトロントに再移動した日系一世たちの、大戦後の「トロントでの経験」を、ライフヒストリーで描き出すというのが研究の目的だったという。実際、それらのライフヒストリーは、小林自身の学位論文というかたちでまとめられている。その後、小林は学位論文で行ったライフヒストリーの聞き取りという実践を、メタ分析の素材として、いくつかの研究を発表しているが、中でも1992年に発表された『〈親密さ〉と〈深さ〉——コミュニケーション論からみたライフヒストリー——』は、語りの場のあり方——ここではライフヒストリーが生まれる状況——をどのようにして考えるべきかという問いについて、いくつかの重要なポイントが示唆されている。

小林(1992)は、語り手によって語られたライフヒストリーを、語り手によって語られた「内容」のレベルと、コミュニケーション行為者としての語り手と聞き手の「関係」のレベルという2つのレベルで把握した。小林によれば、それまでのライフヒストリー研究は、主に、語り手によって語られた「内容」(例えば、語り手のそれまでの人生における艱難辛苦といった経験)が分析・考察の対象になっており、「関係」のレベルは、研究の中では自明の前提として、特に考察の対象とはされていなかったという。そこで小林は、ライフヒストリーにおける語り手と聞き手の「関係」のレベルで、どのような言語的・非言語的相互作用が展開されているのか、さらにそういった「関係」のレベルが、語り手によって語られた「内容」のレベルにどのような影響を及ぼしているのか検討を行い、ライフヒストリーが聞き取られる状況、つまり、「関係」のレベルの自明性について再考している。具体的には、聞き手が、語り手の発話を通して効果的に「あいづち」を繰り返すことによって、語り手と聞き手との間に〈親密さ〉を形成していることが「関係」のレベルで明らかになったということ、そしてこの〈親密さ〉が増すにつれて、語り手によって語られたあるひとつの話題が、異なるストーリーで語られるようになり(この異なるストーリーのことを小林は「ヴァージョン」と呼んでいる)、さらに数回の聞き取りを繰り返すうちに、それらのヴァージョンの表現に〈深さ〉が見られるようになっていったこと(これは「内容」のレベルにおいてである)を明らかにしている。

以上のことをまとめるならば、「関係」のレベルと、ライフヒストリーとして語られる「内容」とが関連しているということである。このように、語り手と聞き手が対面的状況にある場面において、語り手が紡ぎ出されるということを経るならば、聞き手としての研究者が、語り手である対象者の語りの形式や内容に影響を与えていることは容易に想像がつくであろう。決して、語り手によって語られる「内容」だけが、聞き手から遊離し独立しているわけではない。また語りの場から全く独立しているわけでもない。ライフヒストリーが聞き取られる状況、つまり語りの場は、語り手のモノローグのみから構成されているのではなく、あくまでも語り手と聞き手の二者からなるコミュニケーション行為という観点から把握されなければならないというのが、小林が強調している点なのである。

そういった意味では、「共同性」という観点を欠落させたナラティブ論は、そもそも自己矛盾を抱えているのではないだろうか。あくまでも、具体性・個性のなかでのナラティブやライフストーリーを追求する必要があるのではないだろうか。語りを記述するさいに、聞き手の姿を「不可視にする」ことによって、語りの場における「語り手—聞き手」という相互不可分な関係を解体してしまい、そして必要以上に、語り手の語りを断片化・細分化し、最終的には、それらにカテゴリー名を付与して、スタティックなものとして固定化してしまうというあり方は、そもそも語り研究が本来持っているはずの潜在的な「力」を剥ぎ取ってしまうことにはな

らないだろうか。

そして以上のことは、語りの場において「語りは、果たして語り手だけによって語られるのか?」、あるいは「語りは主体的に語られるものなのか?」という問いに、最終的にはかわってくるであろう。「語り手―聞き手」関係が、語りの場のあり方、さらには語りの内容と関連しているということを踏まえるならば、語り手の語りは、決して「独立した語り手」のみに、その出自を還元することはできないはずである。ナラティブ・アプローチは、個体中心主義的な語り研究（そもそもこれは矛盾した表現でもあるが）に後戻りすることは許されないはずである。

それでは、このようなスタティックなカテゴリーに回収されない、語り手の語りが持っているリアリティをすくい出すための手立ては、どのようなかたちで存在するのだろうか。この問いに対しては、山田富秋（2002）による、精神障害者支援団体のフィールドワークが参考になるかもしれない。そのフィールドワークのなかで、山田と調査対象者（支援団体）とは、「精神障害者の地域自立という語りのコミュニティ」を大枠では共有していたが、実際に日々生じる具体的な問題に直面するつど、そのような語りのコミュニティに回収されない調査対象者の語りが生み出されていた（例えば、地域自立という問題において、一律に障害者の意志を尊重するといった単純なストーリーではなく、個々の現在の状態に適したかたちで支援を行うといった新しいストーリー）。一方、調査者（山田）自身は、具体性を持たない二者択一的な「モデル・ストーリー」（本論に即して言うならば、「スタティックなカテゴリー」であろうか）に束縛されていたことを、フィールドワークにおける聞き取り場面のメタ分析を通じて明らかにしている。そして山田は、このフィールドワークから得たものを次のように語る。

かくして私に結論として残ったものは、日常のやりとりのなかで出会うさまざまな語りを本質化しないということだ。そしてそれは日常生活のなかにつねに孕まれている『両義性』を再評価することになる。たとえばS会〔支援団体名：筆者註〕の実践は、確かに理念として精神障害者の地域自立というモデル・ストーリーを持っていたとしても、それは具体的な状況に応じて、いくらでも変化しうる…（中略）…つまり、つねに変動する具体的な状況の要請を満たそうとすれば、〔支援団体の：筆者註〕スタッフの行為にはつねに両義性がまわりつく。そして、それは活動を制限したり、失敗を導くわなどではなく、むしろ多様な可能性にあふれた場所なのである。（山田，2002，p.143）

さらに山田は、調査者としての自分が、調査対象者の語りに見られる両義性を評価できるためには、「バフチンにならなければ……いつも対話や交渉に開かれる一種の『タフさ』を必要とする」（同上，p.143）と述べている。ここには、スタティックなカテゴリーには回収しきれずにこぼれ落ちてしまう語りのリアリティを、いかにして汲み取るか、そしていかにしてそれらを記述するのかということに関するヒントが隠されているように思われる。実際、研究という営みをする限り、ある特定のパースペクティブから語りを扱うのは仕方のないことかもしれない。しかし、実際に語り手から紡ぎ出される語りは、非常に両義性に満ちているものである。そういった両義的な語りを、あるカテゴリーで裁断することは、語りにおける「共同性」や「対話性」をも切り離してしまい、語りのダイナミズムを無視してしまうことになりかねない。

2. 語りと権力性——「共同性」の再検討——

続いて、これは必然的に「語り手—聞き手」の関係性に関する問題とつながってくるのだが、語りの場における権力性あるいは権力作用について述べておきたい。これまで述べてきたように、個々の語りに注目する研究においては、語りの「共同性」、あるいは「共同制作性」ということが理論的前提として含意されている。具体的に言えば、ライフヒストリーにせよ、ナラティブにせよ、語り手と聞き手の相互行為や対話的關係によって共同的に構築されるというパースペクティブである。それは、上述した小林（1992）の研究の中でも触れられている点である。しかし、このような共同性というスタンスに拠って立つ場合、われわれはどこまで「共同性」の内実について、自覚または意識できているのだろうか？ 例えば、われわれは「共同性」、あるいは「共同構築」というタームを用いる際に、無意識のうちに「共同」ということばの中に、「対等な」または「平等な」という意味合いを込めているのではないだろうか（なお、「共同構築」というスタンスをとる社会的構築主義の立場からの語り研究に対し、供述分析に携わっている心理学者から、いくつかの批判が加えられているが、これについては次節で論じる）。

しかし、小林（1992）が論じているように、ライフヒストリーの聞き取りという状況に代表されるような語りの場は、確かに共同制作の場ではあるが、それはあくまでも「社会学的な意図をもった聞き手と自分の経験を語る語り手の対面的相互作用の場」（p.420、下線部は筆者）であり、そこにはミクロな権力作用が発動しているということが、近年のライフヒストリー研究に携わる研究者の共通見解になっている。

ここで、語りの場における「語り手—聞き手」関係における権力性について、いくつかの位相が考えられなければならない。ひとつは、語りの場という実際の現場において、純粹に「語る—語りを聞き取る」といった「語り手—聞き手」関係の位相である。もうひとつは、「調査者—調査対象者」関係の位相である。この関係は、実際の語りの場にもときおり顔を見せる位相でもある。そして第3の位相として考えられるのは、語りの場という「フレーム」からいったん距離を置き、トランスクリプト化されたデータを、自身が抱えている研究上のパースペクティブから検討するという研究者の目があげられる。この位相においてはもはや、語り手の語りは、トランスクリプトやプロトコルデータとして文字化されており、語りの場という「フレーム」からいったん距離を置き、語り手の語りを研究者の目から、トランスクリプトやプロトコルとして文字化された語り手の語りを検討するという、一種独特の「語り手—聞き手」関係である。もちろんこの場合、語りの場から聞き手（つまり研究者）は離れてしまっているのであり、さらに語り手はこの場には不在である。そして、そこに語り手が介入する余地はほとんどないといってもよいだろう。これらの3つの位相のうち、第2の位相と第3の位相が、二重の権力性として立ち現れてくると考えられるが、ここでは特に、第2の位相について検討していくこととする。

小林多寿子と同様に、わが国の社会学におけるライフヒストリー研究の代表的存在である好井裕明（2000）は、自身が編著に携わった『フィールドワークの経験』の中の一章『語りたことと聞きたいことの間で』のなかで、ある被差別部落でのライフヒストリー調査の経験から、ライフヒストリーの聞き取りにおける語り手と聞き手の非対称的な関係について、反省的なとらえなおし、つまり自身がかかわったライフヒストリー実践のメタ分析を行っている。具体的には、被差別部落におけるライフヒストリー調査に、プロジェクトチームの一員として加わった高校教員による高校生へのインタビュー場面をいくつか例にとって、インタビュアーによる

インタビューの管理（コントロール）という視点から、会話分析の手法を用いて語りの場を再検討している。

好井はこれらの聞き取り場面の会話分析を通じて、伝統的な社会調査パラダイムとは異なり、それほど構造化されていないライフヒストリーのインタビューにおいても、「質問／応答」という固定化された相互行為が、語り手と聞き手の非対称的な関係を生み出しているということをまず明らかにした。好井によって提示されているあるひとつのエピソードにおいては、まずインタビュアーである高校教員が、「被差別部落における差別問題」という問題意識に基づいてインタビューを行っているために、語り手としての高校生が紡ぎ出そうとするストーリーの展開が、最終的に差別問題へと行きつくように仕組まれている可能性があるということが示唆されている。つまり、ライフヒストリーの聞き取り場面において、語り手の回答に対してインタビュアーが推論や解釈を絶えずその場で行いながら、ストーリーを「差別問題」というある特定の一点へと収斂させるようにまとめていた。さらにインタビュアーの発話量が語り手よりもはるかに多いという事実から、インタビュアーがこの特定の場面においては、インタビュー管理を維持しようとつとめていることがうかがえると好井は論じている。つまり、聞き手によるインタビューの管理は、「聞き手—語り手」関係の非対称性を示しているともいえよう。

この場合は、インタビュアーが語りの場においてある種の特権性を握っている—支配的な立場に立っている—ことの一例であるが、一方で好井は、こういったインタビュアーによるインタビュー管理の維持のみならず、語りの場において聞き手と語り手がインタビュー過程の管理をめぐる、「語りのポリティックス」とでも呼ぶべき、聞き手と語り手とのせめぎ合いが生じていたことも明らかにしている。例えば、インタビュアーの問いに対して、聞き手は、直接的にせよ間接的にせよ、拒否的な応答をしたり、または問いの内容とは無関係な回答をするなど、様々な戦術をとることによって、インタビュアーによるインタビューの管理に抵抗していたのである。

つまり、ライフヒストリーの聞き取りという語りの場において、純粋な「語り手—聞き手」関係が成立しているわけではない。聞き手であれば、「調査者」という外的な属性が何らかの理由であらわになった瞬間、聞き手が「調査対象者」として可視的になること——突き詰めて言えば、単純な「語り手—聞き手」関係から「調査者—調査対象者」関係の位相への移行——、そういったことが「聞き手—語り手」関係の非対称性を生み出す、つまり権力作用の不均衡が見い出される一因として考えられる。

ここで最初の問いに戻るならば、語りの「共同制作」あるいは「共同構築」と言った場合、「共同」ということばの内実がいかなるものであるか、ということに関しては、実に複雑な問題を孕んでいると言わざるを得ない。「共同」とはあたかも立場的に「平等」、あるいは「対等」である二者（あるいはそれ以上複数の人間）が、「協調的に」解釈や意味を構成したり共有する、という意味あい理解する向きがあるかもしれない。しかし、実際のところはそのようなものではないことが、好井によるライフヒストリーのメタ分析からある程度理解されるのではないだろうか。例えばそこでは、語りの主導権をめぐるポリティックスが、聞き手と語り手の間で、ミクロなレベルであるにせよ、絶え間なく続いていたのである。

つまり、複数の主体が、何かあるひとつの特定の合意点に達するといったかたちでの「共同制作」、あるいは「共同構築」だけではなく、実際に「共同制作」が行われる過程の中でのせめぎ合いやコンフリクト、抵抗、そして認識のズレの修正あるいは拡大といったことが、語りと

いう行為における「共同性」と言った場合に、射程に入れられなければならない問題のひとつであろう。好井のことを引用するならば、語りの場は「権力関係として成立」(好井, 2000, p.115) しているととらえるパースペクティブが必要であると思われる。

3. 「語り得ないもの」をめぐるいくつかの議論

これまで述べてきたように、個人の語りに着目する研究は、実に様々な語りを射程に入れている。しかし、それでは本当に、語り手はその語りにおいて全てのことを言い尽くしているのだろうか。例えば、身を切るような苦しみ、痛み、恐怖、そして悲しみなどを、いともたやすく言語化できるものなのだろうか。例えば、障害に関する語りをテーマとした研究は数多くある。ひとつは障害者本人によって語られたもの(藤澤, 1992; Humphries, S. & Gordon, P., 1992; 能智, 1999; 田垣, 2000, 2002), あるいは障害児・者の親や家族など周囲の人々によって語られたもの(Groce, N. E., 1985; 石川, 1992; 野辺, 1999; 要田, 1999), 場合によっては障害者本人と周囲の人々がともに語ったもの(藤井, 1985) など、理論的な関心は各々の研究によって異なるが、各々の障害に関する体験が語られていることは共通する。ところで、障害にとどまらず、病い、差別、災害、戦争、冤罪などの体験は、しばしば「筆舌に尽くしがたい」と表現される。そのような体験は、いわば日々の平穏な日常生活のなかに、急に走った「裂け目」のようなものであり、有無を言わず暴力的に襲ってくるものでさえある(岡, 2000)。はたしてそのような「裂け目」は、例え過ぎ去った出来事だとしても、言語的な表出として十全に語られうるのだろうか。それがここでの問題意識である。そして、その問題意識をさらに拡張するならば、そのような痛切な痛みを伴う体験を、あえて公共の空間に向かって、言語的に流通させることにどのような意味があるのだろうかという問いにもつながってくる。つまり、非常に私秘的な「語り得ないもの」と、誰かに向かって語る、そして聞き取られるという共同的な営みとして公共空間にそのような思いを表現しようとする努力とのあいだにあるつながり、あるいは乖離について考察することでもある。

浅野(2001)は、物語論的アプローチの立場から、社会的構築主義による語り研究の理論的前提を批判しているが、そこで、構築主義的なパースペクティブによっては、いわゆる「語り得ないもの」を十分に問題化できないと指摘する。ここでの「語り得ないもの」とは、戦争、レイプ、大事故、大規模災害などといったトラウマ的体験だけではなく、「自分自身について物語る」という営みが根源的に持っている、自己言及的な矛盾性をも含んでいるやや幅広い概念である。浅野の論を具体的に説明するならば、構築主義的な自己論は、〈すでに自己構成した語り手→他者への語りとそれに伴う相互行為(自己構成)→構成された自己〉という流れにおいて、〈他者への語りとそれに伴う相互行為→構成された自己〉という相互行為的な側面を重視するが、一方で〈すでに自己構成した語り手〉をあたかも自明なものとしてみなしてしまっているとする。そして、「構成するものとしての自己」と「構成されたものとしての自己」とが限りなく循環し、そこに見られる「宙づり」とでも表現できるような自己物語の不安定性や不確実性(浅野はそれを「物語の“穴”」と表現する)を構築主義的アプローチではとらえることができないと述べる。逆に言えば、浅野が採用する物語論的アプローチならば、このような「自分自身について物語る」という営み(自己物語)の奇妙な構造(p.204)に端を発する「語り得ないもの」を射程に入れることができると主張している。

確かに、構築主義の内部でも、行為主体(agency)の位置づけをめぐる多少の議論がある

ことは事実であるが (Burr, 1995), しかし必ずしも構築主義の全てが主体 (この場合は語る主体) を想定していないわけではない。おそらく浅野は, 「語り得ないもの」の存在を強調しすぎるがゆえに, 構築主義的な「ゆるやかな主体性」を誤解してとらえてしまっているのではないだろうか。例えば, Gergen (2000) は, アメリカにおけるマイノリティによる, 非常に先鋭的で際限のない “identity politics” から抜け出すために, 「関係的自己」(relational self) という概念を持ち出し, 関係の網の目のなかで, 価値観の多様性を相互に承認しあうようなアイデンティティのあり方を構想している。それは浅野が考えているような「伝統的枠組みの制約」(浅野, 2001, p.231) のもとにある個体中心主義的な発想とは異なるものである。

また, 大橋・森・高木・松島 (2002) は, 自らが携わった供述分析の立場から, 社会的構築主義的な想起研究に対し批判を行っている。彼らは, 犯罪事件の被疑者や被告人の弁護団からの依頼を受け, 取調室内の取調官と供述者とのやりとりの一部始終を分析する供述分析を, 過去 10 年間にわたって続けてきた心理学者たちである。当初, 彼らは分析上の戦略として, 想起の社会性に焦点を置く, 社会的構築主義的な分析を行っていたが, それでは, 「過去は『合議によって認定された過去』『現在において構成, 解釈された過去』としてしか扱われない」(大橋他, 2002, p.13) ことになり, 「体験の一回性」や「過去の唯一性」というような, 裁判において被疑者・被告人の運命を左右しかねない部分に触れることはできないと論じる。つまり, 社会的構築主義によるコミュニケーション過程の相対化が, 「体験した者にしか語れないことがある」(同上, p.13) という「語り得ないもの」へのアクセスを不可能にしてしまうということを指摘する。そこで大橋らは, 語り手同士がそれぞれ「動的な個性性」を維持することによって, コミュニケーションの流れが創発するという視点から, 「体験の一回性」や「過去の唯一性」, そして供述者の個性性を把握しようとした。このアプローチを, 彼らは社会的想起研究の先駆者である Bartlett に倣って, 「スキーマ・アプローチ」と名付けている。

ところで, 社会的構築主義に基づく想起研究と, 大橋らのアプローチとのあいだにある齟齬は一体どのようなところから生じているのだろうか。表面的であるかもしれないが推測可能な理由のひとつとしては, 分析対象となっているフィールド, そしてデータの性質の問題があげられるだろう。社会的構築主義的な想起研究の数多くは, 特定の成員によって一定の実践が行われている, ひとつの共同体を対象としたものであり, そのコミュニケーション過程には, ある程度予測がつくかたちで分析しやすい側面があるかもしれない。大橋らが, 社会的構築主義的な想起研究を「人々がさまざまな語りの装置を使いながら過去の出来事について語り合いながら合意を形成していく共同作業のプロセスとしてとらえられる」(同上, p.166) と述べているところからもわかるように, コミュニケーションがある一定の枠組みのなかで, そしてある一致点を目指して進んでいくプロセスとしてとらえていることがうかがえる。言い換えれば, これらの議論は共同性のとらえ方の違いと関わってくる問題であろう。

ところで, 前述した浅野 (2001) の批判と同様に, ここにも社会的構築主義への誤解が多少見え隠れしているように思われる。大橋らは, 社会的構築主義的な想起研究は, 「コミュニケーションを同じ目標に向かう共同作業」(同上, p.166) としてとらえている。しかし, 社会的構築主義のすべてが, コミュニケーションの過程を, 必ずしも共同体における成員間, 完全なる間主観性(intersubjectivity)の一致を目指したものとしてとらえているわけではない。確かに, コミュニケーション論の領域では, 人間のコミュニケーション行為は, ある明確な一致点に向かって行われるものであるのか, それとも, 複数の主体間におけるズレやコンフリクトなども

包含して行われるのかをめぐって、いくつかの立場が存在する。しかし、筆者の立場としては、コミュニケーションの過程が、予定調和的で単線的に進んでいくものとはみなさないし、間主観性の一致を前提とした共同性も想定しない。また、決して共同性が個別性に優越するとも考えていない。大橋らは「動的な個別性」からコミュニケーションの流れが創発すると述べているが、この点についても社会的構築主義的な見地と何ら対立するものではないと思われる。ミクロで個別具体性を帯びた個々人の語りから、マクロな共同体の実践が変容・変革する可能性を見いだすことは、社会的構築主義の理論的道具立てによっても十分に可能ではないだろうか。確かに、参入しているフィールドや扱っているデータの特性から言って、大橋らが「個別性」にこだわらざるを得ないことは理解できる。しかし、「共同体のなかにあってもなお動的な個別性にたどりつく」（同上、p.165）という志向性は、社会的構築主義も有しているはずである。逆に言えば、そもそも社会的構築主義は「共同性か、それとも個別性か」といったような二項対立的視点を有していないのであるが。

以上、社会的構築主義的な語り研究への批判的議論を中心として、「語り得ないもの」と共同性との間にある齟齬・乖離について検討してきた。もちろん上述の議論によって、浅野（2001）が指摘したような、自己物語の根源的なレベルで存在する「語り得ないもの」の存在、あるいは戦争、災害、障害、病いなど、暴力的に襲いかかってくるような「語り尽くせないもの」の存在を、共同性の名のもとに否定するわけでは決してない。それらは確かに存在するものであろう。それでは、なぜ、こういった「語り得なさ」や「語り尽くせないさ」を承知の上で、語り手はその体験を、身を切るような思いをしながら語ろうとするのだろうか。そしてなぜ、聞き手は、語り手の「語り得ないもの」へのアクセスが根源的に不可能かもしれないという前提のもとで、語り手の語りに耳を傾けようとするのだろうか。

この問いに対する答えの一端として、Frank（1995/2002）の病いの語りについての考察が示唆に富むように思われる。Frankは、病いの語りを「語りの倫理」（narrative ethics）という視角から検討する。それまで特別、身体に異常や不具合を感じなかった人間の身体に、ある日いきなり癌などの病魔が襲うことがある。このような経験は、語ろうと努力しても「語り得ないもの」または「語り尽くせないもの」であるが、それでも病いを患う人々は、何とかしてそれらの経験を語ろうとする。そこでFrankは、病む人が自己物語を語ることは、相互に開かれた「伝達する身体」（communicative body）を通して、過去の行為を他者と共有することであり、それは必然的に自分の過去の記憶に対する責任を負うことにつながるということを指摘する。そして、その自己物語が「他者のために話すのではなく、苦しみをともにする者としての他者とともに語る時に表現」（同上、邦訳、p.185）されてはじめて、聞き手と語り手の間に「連帯と関与の倫理」（ethic of solidarity and commitment）が成立する。このことによって、病いを語る側の倫理だけではなく、その自己物語に耳を傾けようとする聞き手にも、相応の倫理性が求められることになる。語るという行為が、相互行為性と共同性を帯びているということは、本論で幾度となく指摘してきたことだが、病いの語りには、倫理性を帯びた共同性が伴っているということをFrankは主張している。

一方で、Frankはそのような病む人の自己物語が、倫理性を基盤としたとしても、完全に共有され得ないことも指摘する。訳者である鈴木智之が、『傷ついた物語の語り手』のあとがきで述べているように、自己物語が語られる際に生じる共同性は、語り手としての病む人の個別性・主体性、そして病いの語りを聞き取る側の他者性を曖昧にしてしまうものではない。むしろ、

「語り得ないもの」に由来する語りだからこそ、両者は厳然と区別される。鈴木は、それらの経験が完全に共有できないからこそ、「もともとの経験を共有しなかった者同士が、その経験の分有を賭けて」（同上、p.285）、語り手は自らの病いの経験を「証言」し、聞き手はそれを真摯に聞き取ろうとするという。つまり、「語り得ないもの」を語ることに聞き取ることが、根源的に不可能であるからこそ、「語るという営みは倫理性を帯び、聴くことの力が試される」（同上、p.286）のであり、そうした不可能性をめぐる語り手と聞き手の関係に、結果として「語りの倫理」が要求されることになるのである。

また、扱っているテーマが異なっているが、Frank が病いの語りという観点から「語り得ないもの」に触れたのと同様に、岡（2002）は戦争、虐殺などの暴力的な〈出来事〉という観点から、「語り得ないもの」について次のような問いを立てている。

言葉では語り得ない〈出来事〉の余剰、あるいは、そうした余剰をはらんだものとしての〈出来事〉、そのような〈出来事〉が他者と分有されうるためには、どうすればよいのか。
あるいは、そのような、〈出来事〉の分有は可能なのか。

（岡真理『記憶／物語』、p.68）

そもそも、〈出来事〉を言葉で表象しようとする、必然的にそこからこぼれ落ちてしまう〈出来事〉の余剰、つまり「語り得ないもの」がどうしても生じてしまうと岡は述べる。それではどうすればよいのだろうか。そこで岡は次の2点を指摘する。まず、人が過去や記憶といったかたちで〈出来事〉を領有するのではなく、〈出来事〉が暴力的なまでに人を領有する。例えば、虐殺や災害のような〈出来事〉の記憶は、個人がたぐり寄せるといよりも、むしろ〈出来事〉の記憶の方から暴力的に個人へと回帰する。そしてそのような〈出来事〉を語ろうとするならば、むしろ「〈出来事〉の領有不可能性」ということを、他者と分有しなければならないと論じる。言い換えれば、徹底した〈出来事〉の他者性についての認識を共有することによって、はじめて、〈出来事〉の記憶—つまり「語り得ないもの」—を他者と分有することの可能性（あくまでも「可能性」）が開かれるのである。

以上見てきたように、Frank と岡の議論に共通しているのは、ひとつは「語り得ないもの」を他者と共有することの困難性または不可能性について述べていることである。一方で、そのような苛烈な困難性や不可能性を、懸命に「語り得ないもの」を語り出そうとして、もがいている語り手の側のみに押しつけるのではなく、聞き手の側も否定なく、そのような困難性や不可能性に真正面から向き合わなければならない。そのような「聞くことの倫理」を端的に表現しているのは、鷺田（1999）の次の一文であろう。

傷ついた〈顔〉にふれるとき、わたしはすでに他者の呼びかけにふれた、あるいはそれを迎え入れたわけであって、まさにそのような他者の苦しみの受信者として自己を認めるかどうかという反省は、いいかえると手を差し伸べるかどうか、ともに苦しむのかどうかという選択は、この接触にとって事後的なものでしかない。他者の痛み、それがまずわたしにふれたのであり、痛みとその傷が、あるいは茫然自失、放心、疲れ、諦め、断念が、まるでブラックホールのようにしてわたしのまなざしを引き込んだのである。

（鷺田清一『「聴く」ことの力』、pp.151-152）

とすれば、語りにおける共同性と呼ばれるものについても、われわれは、そのとらえ方を見直す必要に迫られるかもしれない。つまり、他者とのコミュニケーション過程は、ある一定の枠組みのなかで、そしてある一致点に向かって単線的に進行していく（完全なる間主観性の一致を目指すものとしてのコミュニケーション過程）といったかたちだけでは、語り行為における共同性の内実をとらえ損ねかねないということである。複数の主体が、それぞれ自己物語を語り、そして他者の自己物語を聞き取ろうとする。そしてそこには「語り得ないもの」をめぐる、徹底的な他者性が姿を表すのだが、そのような他者性があるからこそ、人々の間で営まれる「語る一聞く」という相互行為が倫理的な色彩を帯びようになるのだと。われわれは、語るというコミュニケーション過程を考える際に、共同性における他者性、あるいは経験の共有不可能性と、その結果、逆説的にはあるが、語りにもたらされる倫理性を考慮に入れなければならないだろう。

引用文献

- Anderson, H. & Goolishian, H. A. (1992) The Client is the Expert. In McNamee, S. & Gergen, K. J. (eds.) *Therapy As Social Construction*. Sage Publication Ltd. 野口裕二他訳 (1997) クライアントこそ専門家である マクナミー, S. & ガーゲン, K. J. (編著) ナラティブ・セラピー 金剛出版
- 蘭由岐子 (1997) ハンセン病療養所入所者にとっての「家族」九州女子大学紀要, 33, 1-21.
- 蘭由岐子 (2000) ハンセン病療養所入所者のライフヒストリー実践 好井裕明・桜井厚 (編) フィールドワークの経験
- 蘭由岐子 (2002) 差別をめぐる語りと「わたし」の位置取り 好井裕明・山田富秋 (編) 実践のフィールドワーク セリカ書房
- 浅野智彦 (2001) 自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ 劉草書房
- Bakhtin, M. M. (1986) ことばのジャンル 新谷敏三郎他訳 ことば 対話 テキスト (バフチン著作集 8) 所収 新時代社
- Bruner, J. (1987) Life as Narrative. *Social Research*, 54, 11-32.
- Bruner, J. (1990) *Acts of Meaning*. Harvard University Press. 岡本夏木他訳 (1999) 意味の復権：フォークサイコロジーに向けて ミネルヴァ書房
- Burr, V. (1995) *An Introduction to Social Constructionism*. Routledge. 田中一彦訳 (1997) 社会的構築主義への招待 川島書店
- Epston, D. & White, M. (1992) A Proposal for a Re-authoring Therapy. In McNamee, S. & Gergen, K. J. (eds.) *Therapy As Social Construction*. Sage Publication Ltd. 野口裕二他訳 (1997) 書きかえ療法 マクナミー, S. & ガーゲン, K. J. (編著) ナラティブ・セラピー 金剛出版
- Frank, A. W. (1995) *The Wounded Storyteller*. Chicago: The University of Chicago Press. 鈴木智之訳 (2002) 傷ついた物語の語り手 ゆみる出版
- 藤井達也 (1985) ある「精神障害者」家族の生活史と一民間団体の社会復帰活動 社会学年誌, 26, 73-91.
- Gergen, K. J. (2000) From identity to relational politics. In Holzman, L. et al. (eds.) *Postmodern Psychologies, societal practice, and political life*. Routledge.
- Groce, N. E. (1985) *Everyone Here Spoke Sign Language: Hereditary Deafness on Martha's Vineyard*. Harvard University Press. 佐野正信訳 (1985) みんなが手話で話した島 築地書館
- 浜田寿美男 (1993) 発達心理学再考のための序説 ミネルヴァ書房
- 長谷正人 (2000) セルフヘルプグループの調査実習から：「個別的な苦しみ」をめぐる社会学の可能性 大村英昭 (編) 臨床社会学を学ぶ人のために 世界思想社
- 保坂裕子 (1998) 教室学習場面における動機とアイデンティティの物語的構成：教室の解釈的参加観察研究 日本教育方法学会紀要, 24, 39-48.

- 石井宏典 (1993) 職業的社会化過程における「故郷」の機能——生活史法による沖縄本島一集落出身者の事例研究—— 社会心理学研究, 8 (1), 9-20.
- 石川准 (1995) 障害児の親と新しい親性の誕生 井上眞理子・大村英昭 (編) ファミリアズムの再発見 世界思想社
- 岩本隆茂他 (1995) 現代心理学の基礎と応用 培風館
- 片桐雅隆 (2000) 自己と「語り」の社会学：構築主義的展開 世界思想社
- 片桐雅隆 (2003) 過去と記憶の社会学：自己論からの展開 世界思想社
- 小林多寿子 (1992) 〈親密さ〉と〈深さ〉：コミュニケーション論からみたライフヒストリー 社会学評論, 42 (4), 89-104.
- 小林多寿子 (1995 a) 自分史と物語産業の誕生：1980年代の動向から 日本女子大学紀要 人間社会学部, 5, 89-108.
- 小林多寿子 (1995 b) 賞をめざした自分史：動機の語彙と「人生」の呈示 日本女子大学紀要 人間社会学部, 6, 23-38.
- 小林多寿子 (2000) 二人のオーサー 好井裕明・桜井厚 (編) フィールドワークの経験
- 小森康永・野田裕二・野村直樹編著 (1999) ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社
- 倉石一郎 (2000) 語り (直し) の実践としての人間形成：日本社会の朝鮮人マイノリティにおける「自己」の構成をめぐる 2000年度京都大学大学院博士論文
- 倉石一郎 (2002) 調査体験を通して生きられる〈差別の日常〉 好井裕明・山田富秋 (編) 実践のフィールドワーク せりか書房
- 松島恵介 (1996) 対話における「過去」の存在：心的過去をめぐる対話の分析 実験社会心理学研究, 36 (1), 170-177.
- 森真一 (2000) 自己コントロールの檻：感情マネジメント社会の真実 講談社
- 森岡正芳 (1994) 緊張と物語——聴覚的統合による出来事の変形—— 心理学評論, 37, 494-521
- 中野卓 (1995) 歴史的現実の再構成 中野卓・桜井厚 (編) ライフヒストリーの社会学 弘文堂
- 中山まき子 (1991) 生活史からみた「子産み」：初めての妊娠を中心に 目白学園女子短期大学紀要, 28, 199-222.
- 波平恵美子 (1992) 語られることと書きとめられること：精神医学における臨床的現実 (リアリティー) をめぐって 講座人間と医療を考える・第4巻
- 野辺明子・加部一彦・横尾京子 (編著) (1999) 障害をもつ子を産むということ 中央法規
- 野家啓一 (1996) 物語の哲学：柳田國男と歴史の発見 岩波書店
- 能智正博 (1999) 障害者における自己の捉え直しとしてのライフストーリー：語りの教育心理学 発達 No. 79, 49-57.
- 大橋靖史・森直久・高木光太郎・松島恵介 (2002) 心理学者、裁判と出会う：供述心理学のフィールド 北大路書房
- 岡真理 (2000) 記憶／物語 岩波書店
- Plummer, K. (1995) *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*. New York: Routledge.
- 桜井厚他訳 (1998) セクシャル・ストーリーの時代：語りのポリティクス 新曜社
- 桜井厚 (1992) 社会学におけるライフヒストリー研究：その手法における特質と問題 ソーシャルワーク研究, 18 (3), 144-149.
- 桜井厚 (1995) 生が語られるとき 中野卓・桜井厚 (編) ライフヒストリーの社会学 弘文堂
- 桜井厚 (2000) 語りたいことと聞きたいことの間で 好井裕明・桜井厚 (編) フィールドワークの経験
- 佐々木正人 (編著) (1996) 想起のフィールド：現在のなかの過去 新曜社
- 佐藤健二 (1995) ライフヒストリー研究の位相 中野卓・桜井厚 (編) ライフヒストリーの社会学 弘文堂
- 佐藤浩一 (1998) 「自伝的記憶」研究に求められる視点 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 47, 599-618.
- Shotter, J. (2000) From within our Lives Together: Wittgenstein, Bakhtin, and Voloshinov and the Shift to a Participatory Stance in Understanding Understanding. In Holzman, L. et al. (eds.) *Postmodern*

Psychologies, societal practice, and political life. Routledge.

- Humphries, S. & Gordon, P. (1992) *Out Of Sight: The Experience of Disability 1900-1950*. UK: Northcote House Publishers Ltd. 市橋秀夫訳 (2001) 「障害者」を生きる：イギリス 20 世紀の生活記録 青弓社
- 田垣正晋 (2000) 中途障害者が語る障害の意味：「元健常者」としてのライフストーリーより 京都大学大学院教育学研究科紀要, 46, 412-424.
- 田垣正晋 (2002) 生涯発達から見る「軽度」肢体障害者の障害の意味：重度肢体障害者と健常者との狭間のライフストーリーより 質的心理学研究, 1 新曜社 36-54.
- 鷺田清一 (1999) 「聴く」ことの力：臨床哲学試論 TBS プリタニカ
- やまだようこ (1999) 人生を物語ることの意味：なぜライフストーリー研究か？ 教育心理学年報, 39, 146-161.
- やまだようこ (編著) (2000) 人生を物語る：生成のライフストーリー ミネルヴァ書房
- 山田富秋 (2002) 精神障害者をめぐる「語り」のダイナミズム 好井裕明・山田富秋 (編) 実践のフィールドワーク セリか書房
- 好井裕明 (2000) 「啓発する言説構築」から「例証するフィールドワーク」へ 好井裕明・桜井厚 (編) フィールドワークの経験 セリか書房
- 好井裕明 (2002) 啓発映像を解説する 好井裕明・山田富秋 (編) 実践のフィールドワーク セリか書房
- 要田洋江 (1999) 障害者差別の社会学 岩波書店
- White, H. (1981) The value of narrativity in the representation of reality. In W. J. T. Mitchell (ed.) *On narrative*. Chicago: The University of Chicago Press. 原田大介訳 歴史における物語性の価値 ミッチェル, W. J. T. (編) 物語について 平凡社